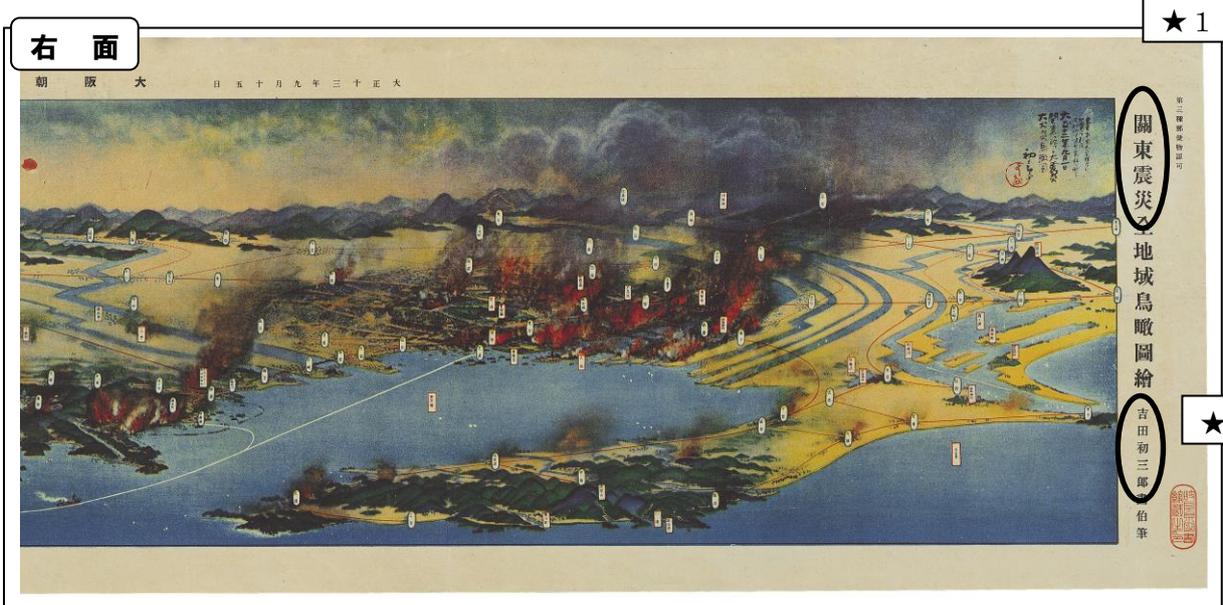


授業で使える当館所蔵地図

No. 22 『関東震災全地域鳥瞰図絵』
 作成年：大正13年（1924）
 サイズ：26×108cm（多色刷）
 作者：吉田初三郎（筆） 大阪朝日新聞社（発行）

原 図



【解説】

この図は、関東大震災の火災の凄まじさを、鳥瞰図に描いたものである。一枚もの6つ折りで構成されている。東京、横浜、鎌倉など太平洋沿岸の各被災都市が炎上する夜の情景を海側から描いている。★2吉田初三郎作品では唯一、夜を題材としている。画面は、西は静岡から東は筑波山までをカバーしている。

画面右端には、自筆で「関東に於ける大震災大火災鳥瞰図」とあり、東京帝大地震学教室の今村明恒博士（関東大震災を予測したとされる）の指導を受けたことが記されている。

なお、本図は大阪朝日新聞が関東大震災一周年に際し、付録として作製したもので、「震源地」相模湾の上空に朝日新聞社機が飛ぶ構図となっている。

【参考：古地図の世界Ⅳ鳥瞰図・吉田初三郎のパノラマ地図】

★1 関東震災（関東大震災）

1923（大正12）年9月1日午前11時58分、関東南部を大震災が襲った。ちょうど昼食時であったため各地で火災が発生した。1府6県の死者・行方不明者10万人余、倒壊家屋約13万棟、全焼約45万棟という壊滅的な大災害となった。

★2 吉田初三郎

吉田初三郎は1884年3月4日京都市中京区に生まれる。初めは友禅凶案の職工として奉公に出て、その後の明治42年、洋画家の鹿子木孟郎に弟子入りする。西洋画を志すが果たせず、師匠に「まだだれもやっていない商業画を目指したらどうか」と勧められて鳥瞰図に取り組み始めた。

友禅凶案の作成経験は商業デザインの感覚を、洋画の経験は芸術的感覚をみかく結果となり、看板絵から脱却した初三郎式鳥瞰図技法を生み出す。その出世作が、大正2年の「京阪電車御案内」で、関西を行啓中の皇太子（のちの昭和天皇）の目にとまったのは翌大正3年のことだったという。

大正から昭和にかけての日本の観光ブームによって初三郎の鳥瞰図の人気は高まり、大正名所図絵社を設立する。その顧客は国内の交通行政を所轄し、観光事業にも強い影響力を持っていた鉄道省を筆頭に、鉄道会社やバス会社、船会社といった各地の交通事業者、旅館やホテル、地方自治体、それに新聞社などであった。しかし、第二次世界大戦が進む中、初三郎式鳥瞰図は港湾等の軍事機密が見て取れ、地政学上好ましくないという軍部の判断の下、不遇の時代を送る。戦後、初三郎が最初の大きな仕事として引き受けたのは、広島原爆の被害を鳥瞰図にする仕事であった。昭和天皇を敬愛し、日本を愛した初三郎は、渾身の図をまとめ、世をさることとなる。

★3 複葉機（飛行機）

初三郎の鳥瞰図の上空には複葉機がよく描かれている。初三郎は「ここ50年を出でずして、飛行機万能の時代の来るべきを確信している」（「旅と名所」第22号 1928年）とも述べている。

【参考：吉田初三郎のパノラマ地図（平凡社）】

【利用の例】

○関東大震災の様子を伺うことができる。

→1923年9月1日の関東大震災についてとらえることができる。震源が相模湾であることや、被害が静岡から房総半島まで、関東一帯にもたらしたことをとらえることができる。また、ちょうど昼食時間帯で火災も多くおこったこともとらえられる。

○当時の主要な交通路を知ることができる。

→当時の主要な交通路をとらえることができる。陸上交通については、赤線で海上交通については白色で描かれており、当時の都市のつながりや交通路をとらえることができる。

○交通手段の変化を知ることができる。

→人々の生活の中に飛行機が入り込み始めた時代であることをとらえることができる。